

高橋良雄さんの

# 及位の昔話（一）

編 山形民話の会・武田 正

編 山形民話の会

武田 正

# 及位の昔話（一）

話・著 高橋良雄

高橋良雄さんの

及位の昔話（二）

1 修験者と大蛇

五

2 豆こむがし

一〇

3 よごばり和尚

一九

4 小間物忠兵衛

二四

5 化げおのむがす

三六

6 天狗むがし

四〇

7 聾えらび

五一

8 馬鹿聾はなし

五七

9 蛇んであえんなた与蔵

六一

10 鳥こむがし

六八

付記

七二

## 凡 例

○ 原稿のかなの部分是一部漢字として読みやすくなおした部分があるが、話し言葉を尊重してルビをふって補った。

○ 原稿は二冊に分かれ、合せて七十六枚と目次になっている。

## 1 修験者と大蛇

むがしあつたけど。及位のぞきに、こしぎで、高たげあえ山あんべ。あの山まだ「雄おこしぎ」と「雌めこしぎ」ど、二したつあんなよな。

ずつと昔おなじな、あのこしぎの、雄おなじこしぎの方さ、まだ男の大蛇、雌おなじこしぎの方さまだ女の大蛇いであえつたど。

ほうして、ほの大蛇ずあ大つきおんで大つきおんで、男の大蛇まだ、雄おなじこしぎ七巻むぎ半もめあえでんなだけど。ほうして、女の大蛇まだ、雌めこしぎ六巻むぎもめあえでつけど。

ほうして、天氣のええ日あ、こしぎの後にある、大つき沼さへていんなだけど。ほうしてほの沼えままだ今こしぎのすぐ裏の下に、名勝沼てあんべ、ほれがらずつと行えぐど、まなごの大池てあんべ、ほのしたつつの沼まだ、ほんづぎあ、まだ続つづでて、ほれこそ大つき沼であえつたど。ほんげあえ大つき沼だおの、大蛇二匹ふた匹の楽たのし入いあえるえがつたべちやなあ。

ほうして、空曇て来たり、雨なの降つど、出はてきて、及位の村みでんなだけど。ほうして、及位のあっちこっちの部落がら、毎年米五百俵もとり上げで、三年に一度は、一人ひとりず娘さらって行くえなだけど。んだはげあえ、及位の人したちあみんな困ていだあだけど。

ほうして、困ていだどき、どからが、額ひでえさ頭巾ときんずおのついで、ぼろぼろの汚よごつだ衣着た修験者きたけど。ほの修験者まだ及位の方さ崖たけなてる、高たけあえ山で、修行するよだ山ねあえべがどもて、山さがしん来たけなだけど。つらなの陽にやげで真黒だべし、髪などまで陽にやげで赤茶けでるし、髭ひげなのぼうぼうだおんださげあえ、年なのなんぼくれあえだか分らねけど。

ほの修験者まだ及位の人したちあ、ほの大蛇で困てるていう話聞きで、なんとがほの大蛇退治して、及位の人したちあどご助けねんねと思たあだど。ほうして、困て人しどご助けでやれば、おわ（自分）えままで修行してきた法力もためされつし、おれあ修行して来たなも、みな困てる、人しどご助けるためなんだし、これがおれのほんとの務めだと思たど。

ほうして、部落の人たちに手伝ってもらて、祭壇つくってもらて、いよいよそさ登て、御祈禱すんべと思たら、急に空まっくらんて来て、雨あざあざど降るんだが、大風まで吹えてきて、祭壇は飛ばされ、ほれさ、しょねがの川大水んて、祭壇なの、どさが流さつてしまたけどは。これあ、こしぎの大蛇だあ、修験者の法力で退治されつどもてしたごどであえつたどや。

ほんで、修験者まだこれだばとでも駄目だともて、こんだあ、部落のしたちに、土用のうしの日ん、よもぎ、しこでま（たくさん）刈てもらて、ほれ干して、祭壇こしえるあだりさ、祭壇かごで、ずらつと積でもらたど。ほうして、ほれさ、火付けでえぶしたど。ほうしたば、ほの煙あ、こしぎの方さ流つて行くけど。ほうすつど大蛇だあ、ほの煙でえぶさつて、こしきにいらんねぐなて、下の沼さ、くぐてしまたけどは。

ほうすつど、修験者、「今だ」て言うど、祭壇つくて、ほれさ上がて御祈禱始めだずおん。村の人たちも一緒なて、一所懸命おがだど。ほしたば、大蛇、なんぼしたて沼がら上がらんくなてしまたけどは。んだおんだはげあえ、大蛇だく

やしがて、沼がらせえも出られつごつたら、まだ、大雨風降らへで、あんた祭壇も、修験者ど一緒えっしょん、吹つとばしづげて呉くえんなだもて、沼んながで、二匹あ大あばれしつたけど。んだて、沼でなの、なんぼあばつてみだて、沼の水あ吹つ飛ぶぐれあえのおんで、なんずもかんずもでげねがつたど。

修験者まだ、祭壇で神さまだちさ、一心なて「大蛇退治して、村の人たちどご助けで呉ころ、ほうすれば、おれなの、なんずんなてもええはげあえ、どうか大蛇退治して、村の人たちどご助けで呉ころ」ていたのだど。ほんで、神さまたちあ、ほの位くれあえ一心なて人助ける気持だば、助けでやれて言うごどんなて、んであ、山の神さま、おめあえ行えて来こえ、て、山の神さまだこ寄越したけど。

山の神さま、おなごの神さまだども、白え着物おのきて、とでも威厳あて、神々しい神さまだずおん。ほの神さま、沼の側さきて、大蛇ださ、

「お前だちは、長年及位の百姓だどご苦しめで来たようだが、どごが遠ぐさ移るごつたら、今えままでの罪は許してやるが、どうだ。」

て聞いたど。ほしたば、二匹あ相談しつたけど。ほうして、

「おらだ、ほがさ移るたて、これくれあえ大つき沼んねば駄目だし、ほげた大つき沼だば、みな他の大蛇だ主んなてるはげあえ、行くどこあねは。」

て言うけど。ほんで、山の神さま、

「ほんであ仕方ね、元の竜宮さ返あえれ。」

て言たど。ほしたば、大蛇だあ、

「あんた固苦し、きゆうぐつだどさなの嫌だ。」

つけど。ほうすつど、山の神さま、ごしえで（怒って）、

「おれの言うごと聞がんねなが。んであ、え。」

て言うど、辺りの山、がらがら崩して、大蛇だどご、沼がらみ、埋めでまた

けどは。ほうして、大蛇だ、退治さつでまたけど。

んだはげあえ、ほの大つき沼埋めらつでしまて、しりど頭さ少し残たばんだけ

ど。ほんで、頭さ名勝沼、尻さ大池あ出げだあだけど。

ほんで修験者、御祈祷したあであえあつたて、喜び、村の人たちあ、御祈祷し

てもらたおかげだて、お祀りして、修験者さお礼もし、まだ、改めて神さまだち

さもお礼参りしたけど。

ほしてな、ほの修験者まだ偉れ<sup>え</sup>あえおんで、おれの修行あれがらだて言うなで、こしぎさ登つて、おわ足（自分の足）木さゆつづけで、こしぎの崖<sup>さか</sup>から逆さんなて、ぶらさがて修行したあだど。

こげあえん崖がら逆さぶりんなて修行すんなば、「のぞきの行<sup>い</sup>ていうおんだど。ほうして、ほの修験者、まだ一心なて難行苦行して、立派な悟り開れ<sup>ひ</sup>あえだなだど。ほうして、京さのぼて偉い位もらうような坊さんになたけど。

とんぴん からんこあ ねっけどは。

## 2 豆こむがし

むがしあつたけど。

<sup>あおおの</sup>

むがしな、旧村に春あ、青物とて、あどあ炭焼えで暮しつた若げあえ者<sup>おの</sup>いであつ

たど。名前<sup>め</sup>、三吉ていうなだけど。

ある時<sup>つぎ</sup>、三吉あ、今日あ竹の子<sup>こ</sup>でもとてくんべど思<sup>も</sup>て、こしぎの裏<sup>え</sup>さ行<sup>え</sup>たど。ほうして、昼間近ぐなたよだし、水のあつどさ行<sup>え</sup>て、飯食<sup>ま</sup>うべどもて、名勝沼の方<sup>え</sup>さ行<sup>え</sup>たど。ほうして、ほの近ぐさ行<sup>え</sup>たば、なんだが沼でばしやばしやていう音あすっけど。

ほの名勝沼ずあな、辺りあブナのすこであえま（すばらしく）大つき木あ、えっぺ生<sup>お</sup>えで、水のとでもきれた沼で、うんと美ぐす沼で、雁<sup>えん</sup>なの鴨<sup>も</sup>なのえっぺ来る沼だど。んだはげあえ、三吉あ鴨<sup>も</sup>でもえっぺ来<sup>き</sup>で騒<sup>さわ</sup>ぐなだべがど思<sup>も</sup>て、そつと木のかげがらのぞこで見だど。ほしたば、鴨<sup>も</sup>なのんねくて女子<sup>こ</sup>したちだけど。んだおんだはげあえ、三吉あ、どでしてしまたけど。ほうして、なんだて、こんな山<sup>やま</sup>ん中の沼<sup>しづ</sup>さなの来<sup>き</sup>て、女子<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>たちあ水浴<sup>すいよく</sup>びなのしつたおんだべど思<sup>も</sup>て見<sup>み</sup>つたど。ほうして、どこの女子<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>たちだべど思<sup>も</sup>て、えっくん見<sup>み</sup>んべて、大つき木廻<sup>まわ</sup>て見<sup>み</sup>だば、三吉<sup>さんきち</sup>なのまだ見<sup>み</sup>だごどのねえ、美<sup>うつく</sup>ぐす女子<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>たちあ三人、裸<sup>はだか</sup>んなて沼で水浴<sup>すいよく</sup>びだけど。

どこの女子衆たちなおんだが、見だごどのねえ女子衆たちだおんだ。ないだどて、こんなどき来て水浴びしたおんだべ、て三吉あただ魂消て見ただど。

ほうしたば、おわ（自分の）脇の方から、なんだがとでもええ匂えあ、して来たけど。ほんで、三吉あほつつの方見たば、透きとおるよだ美す着物あ木の枝さ掛ったけど。三吉あ、「なんだて美す着物だごど、家さもって行くべ」ていうなで、ほの着物ただで、おわしどころさ入でしまたあだどは。ほうしてる内ん、女子衆たちあ、こつつの方さ来つけど。ほんで、三吉あ藪のかげさかぐつで見ただど。ほうしたば、したりあ、三吉あ隠したなど同ず着物きたども、もう一人あ、「おわ、着物あね」どて、あつこつつ、うんと探すけど。なんぼ探したて、ねんだはげあえ。三吉んとらっでしまたおんだおん。ほんでは、ほの女子衆とあ泣き始めだけどは。ほうしたら、後の二人あ、「おらも誰かにしめらえっがしんね（捕われるかも知れない）」て、おかねあぐなで、おわ着物広げで、空さ飛で行てしまたけどは。一人のごさっだ女子しとあ、ほごさしやがまて、ただしくしくど泣っただけどは。三吉あ、そつとほの女人の側さ行て、やさしく、

「姉こ姉こ、なして泣ぐや」

て言<sup>ゆ</sup>たど。ほうしたば、ほの姉こあ泣ぎながら、

「羽衣<sup>きおの</sup>という着物、誰がにとらつてしまて、天さ帰<sup>け</sup>あえらんねぐなてしまて、ほんでおかなくて、悲すくて泣つたなだ」

つけど。三吉あ、むぞせぐなて、

「んであ、まづ、おれあ家<sup>え</sup>さ行<sup>え</sup>ぐ。なんにもおかなぐねえはげあえ、誰あとたが、後でおれあ探<sup>く</sup>して呉<sup>く</sup>えつさげあえ、泣ぐな、泣ぐな」

て、やさしぐ言<sup>ゆ</sup>て、おわ家<sup>え</sup>さ連<sup>つ</sup>で行<sup>え</sup>たど。ほうして姉こあ、三吉あ、やさすぐして呉<sup>く</sup>えるおんだはげあえ、食うごどがら、つぎおの（つくろいもの）なの、家<sup>え</sup>んながのごど何でも一所<sup>うづ</sup>けんめしているよんなたあだど。

ほうしてな、ほの内<sup>うち</sup>ん、ほれ、二人あ若<sup>したり</sup>げおんだし、仲えぐなて、おぼこあ出<sup>したり</sup>げだあだけどは。男わらすで、めんごえわらすこだけど。二人あよろごで、大事んして育でつだけど。んでも三吉あ、若<sup>わ</sup>げあえなたおなごしとあ、何とがして羽衣見つけで、もう一度天さ帰<sup>け</sup>あえりであえど、いづでも思ていんなであえつたど。

ほのうづ段々時あ経<sup>た</sup>つて、三年すぎ、四年すぎ、わらすこも三つつんなり、四つつんなり、ほのうづ五つつんたけど。三吉あ誰あどさも教<sup>お</sup>ねで、羽衣押入の小<sup>ち</sup>ちえ竹簾さ入<sup>へ</sup>つで、ほの上<sup>ゆゑ</sup>さ布団<sup>め</sup>つんでかぐしつたあであえつたど。

三吉のわけあえ、にゆうべあえも過ぎだんだし、着物<sup>きもの</sup>なの布団<sup>め</sup>なの虫干<sup>むす</sup>すすんねんねどもて、押入がら布団<sup>め</sup>なの皆出して乾がしたけど。ほうしてな、押入がら布団出してみだば、押入の隅<sup>すま</sup>こさ、小<sup>ち</sup>つちえ竹簾あつたけど。ほんであねこあ、  
「あら、こういうおのあ、あるちは、これさも着物<sup>め</sup>あ入<sup>へ</sup>つたなだべが」

ど思<sup>も</sup>て、ほれ開<sup>ひ</sup>けでみだど。ほしたばほれ羽衣だべ。どするんだが、うれすんだが分<sup>わ</sup>らねけど。ほうして、ほの羽衣みつけどは、天さ帰<sup>け</sup>あえりであえくて帰<sup>かえ</sup>あえりであえくて、だまつていらんねぐなたけどは。

んでも、おわ産したわらすこごめんこえす、やさしぐしてくつたおわにどごもいだますくて離<sup>は</sup>れらんねす、何<sup>なん</sup>すんしたらえべて、うんと悩<sup>なや</sup>だど。んでも天さ行<sup>え</sup>ぎであえくて天さ行<sup>え</sup>ぎであえくて、しようねがつたど。「おわ、一人<sup>ひとり</sup>だば、天登<sup>てん</sup>んな造<sup>じよう</sup>作<sup>さく</sup>ねども、兄<sup>あに</sup>どわらすこご背<sup>し</sup>負<sup>よ</sup>てだば、重<sup>おも</sup>であえくて連<sup>つ</sup>で行<sup>え</sup>けねべし」て、

困てしまたけど。

ほうして七日なのばり経たぶど、ええごどもい当でだど。ほれあまだ天まで届とつぐ豆こ植ゆえらへで、ほれあ大つきぐなたら、ほれ登て天まで上がて来え、ていうごどもあえつたど。

ほんで、置手紙けあえで、ほれさ豆こ一つぶ入へつで、羽衣みつけだはげあえ一足先ん天さ上がつさげあえ、この豆こ植ゆえで、毎日肥料呉こやしつで、朝晩水一升ずつ呉えつど、百日目ん天さとづぐはげあえ、百日たたら、わらすこ背負て必ずのぼて来て呉ころて、書けあえで、晩のお膳の上ゆえさあげで、天さ上がて行えてしまたけどは。

表で遊んでだわらすこあ、晩方しめん家えさ入へてきてみだども、ががいねべ。んだおんださげあえ、「がが、がが」て泣きながらさがしつたけど。ほごさ三吉あ帰あえて来て、

「めご、めご、なして泣つたや」

て聞きだば、わらすこあ、「ががいね、ががいね」て、三吉どさ、とつで泣ぐけど。三吉あ、

「ががなの、どさも行がねんだはげあえ、裏さでも行たべ」

て言たども、わらすこあ、

「家ん中にも、裏にもいねけ」

て、おおんおおんて、泣くけど。ほんで三吉あ、晩方しめん、家ん中にも裏にもいねなておがすおんだと思て、探してみだども、どこにもいねけど。ほうして、家ん中さ、まだ晩の仕度してお膳も出してるし、えま時ぶん、どさ行たおんだべ、不思議だおんだ、飯の仕度も上げっただようだしと思て、お膳さかげっただ布巾取てみだずおん。ほしたば、紙ただんだなお膳にあつずおん。三吉あ、はつと思てほれ見だば、置手紙だずおん。ほれさほれ（先ん天さ上がつさげあえ、この豆こめあえで、百日目ん、わらすこ連で、天さのぼて来て呉ろて書がつたべ。んであ、とうとう羽衣見つけらつてしまたが、んであ、なんずもしよねずんだ。と思たけど。ほうしてな、三吉あ、次の日起ぎつどすぐ、ほの豆こめあえで、毎日、肥料呉つであ、朝晩水一升ずづかげっだど。ほしたば豆こあ、そんま芽出して、毎日々々大つきぐなて行くけど。ほうして五十日もすつど、大つきぐなて、大つきぐなて、

天さどどぐみであえだけどは。

ほのえあえだわらすこあ、ががあががあて、毎日泣でんなだけど。三吉あわらすこどもむぞせあえ（かわいそう）す、おわも早く会いでんだす、わらすこどさ、

「泣ぐな泣ぐな、つあつあそんまががどさ連で行くはげあえな」

てだましてつかったど。んでもわらすこあ、

「つあつあ早ぐががどさ連で行こ、早く行こ」

どて、毎日泣がえるおんだはげあえ、むぞせくて三吉も時々もらい泣ぎしてつがったど。

ほうしている内ん、時あたつて九十九日目んなたけど。三吉ああんまりわらすこに泣がえるおんだはげあえ、今日あ九十九日目で、百日さあど一日足んねども、豆こあこんぎやえ大つきぐなたおんだおん、天さ届たべはげあえ、のぼて行てみんべ、ていうなで、わらすこどこ、んぶて、豆ぬ木登てえたど。ほうしたば、天ずあ遠えおんで、高おんで、途中なんども休まねど登らんねけど。ほうして登て行

たば、あど三尺ばり足んねくて、天さ届とがねけど。

「あらあら、あど三尺ばり足んねであえは、これであ登らんねは、困たちや困たちや」

て困てしまたけどは。ほんでわらすことさ、

「めごめご、大つき声で、ががさあて叫さでみろ」

て、わらすことさ言ゆたど。ほんでわらすこあ大つき声で、

「ががさあ、ががやわあ」

て叫さぶずおん。ほしたば天にいだがが、

「なえだて、おれあええのめごあ叫ぶよだ声だごど。んでもまだ一日早えどもな」  
て思てだら、ほごさ、まだ、

「ががやあ、ががやわあ」

て叫ぶ声あすつずおん。ほんで声のする方さ走してみだど。ほしたば、おわ家えの兄あわらすことさ背負ふて、豆ぬ木登てきったあだけど。ほうして天さあど三尺ばりんどごまで来たども、豆ぬ木あ、あど一日分伸び足んねおんだはげあえ、天さ

も行<sup>え</sup>がんね、下さも下りらんねぐなて、わらすこどさ、さがばへっだなだけど。

ほんで三吉のわけあえ、

「なえだて一日早く来たながは。んだはげあえ百日目ん登れ、てけあえできたあ  
であえった。んだて来てしまてがら、しょね、までまで」

ていうど、おわ髪ほどえで下げでよごして、「これさ、手ぐづ<sup>た</sup>えで登れ」ていう  
けど。ほんで三吉あ、かが髪ぎつつぐつかで、よやつと天さのぼたど。ほうして  
三人、まだ天で仲えぐ暮したけど。とんぴん からんこあ ねつけどは。

（集成二一八「天人女房」）

### 3 よごばり和尚

むがしあつたけど。

あるどさお寺<sup>でら</sup>あつてな、ほのお寺さ和尚さんど小僧<sup>こんぞ</sup>こあだ三人いであえつたど。

ほの和尚さんずあまずまずよごばりでよごばりで、んめあえ物ものもらたて、おわばり食て、小僧こあだどさなの、さっぱり食かへねで、隠しておわばり食てんなだけど。

ある時、んめそだ梨つぎ一つもらたけど。ほんでほの梨、小僧こあだどさ、めへずらがして（見せびらかして）食うべどもていたど。んでもただ食たて面白おもへぐねげあえ、どうへ小僧こあだなの、ろくでもない）歌つぐんねべはげあえ、歌上手ん作たおのさ、この梨呉くえるて言てみゆつがな、て思たあだけど。ほうして小僧こあだどこ集あつべで、

「ええが、ここに梨一つあんども、一つはんてねはげあえ、三人さは呉くえらんね。んだはげあえ歌一番上手ん作たおのさ呉くえる」

て言たど。ほうして、

「んだども、ただ作たて面白おもへぐね。ええが、へ切りだぐもあり、切りだぐもなし」という言葉入へつて作ぐれ。ええが」つけど。

ほんで小僧こあだ、ほの梨食いであえんだし、うんと工面くめんしてたけど。ほの内うちん、

しりの小僧こあ、

「和尚さん、おれあ出げあした」

ていうけど。ほんで和尚さん、

「でげだが、んであ、言てみろ」

ていうおんだはげあえ、小僧こあ、

十五夜の月がかくれるあの枝を

切りだぐもあり 切りだぐもなし

て言たば、「うう。ながながえぐ出げだ。んでもまだ二人<sup>したり</sup>いだはげあえ待ちでろ」  
つけずおん。ほの内ん、こんだもう一人<sup>ひとり</sup>の小僧こあ、

「和尚さん。おれも出げあした」

ていうけど。ほんで和尚さん、

「ほう。出げだが、んであ言てみろ」つけど。ほんで二番目の小僧こあ、

硯<sup>すずり</sup>ばご中に余れる筆のさや

切りだぐもあり 切りだぐもなし

「こういうなです」

て、いうけど。ほんで、

「うう、わるぐね、わるぐねあえども、えま一人<sup>ひとり</sup>出げねはげあえ待で」

ていうけど。ほしたばこんだ三番目の小僧こあ、

「おれも出げあした。和尚さん」

ていうけど。

「ほう、出げだが、んであ<sup>ゆ</sup>言てみる」

つけど。ほんでほの小僧こあ、和尚さんのつら見て、にやにや笑いながら、

「こういうな、どうすや和尚さん。ええが、

梨<sup>し</sup>一づおしむ坊主のあの首を

切りだぐもあり　切りだぐもなし」

て言<sup>ゆ</sup>たど。ほしたば和尚さん、まっか顔<sup>っら</sup>面して、

「この小僧あ、ろぐだごと言わねっ」

ていうど、いぎなりほの梨、ほの小僧こあどさぶからでやたけど。ほうすつどほの小僧こあ、ほれ拾うど、

「ありがだし、和尚さん」

ていうど、ほの梨、がりがりど食てしまたけどは。とんぴん　からんこあ　ねっけどは。

（集成五二九「旅僧と子供」）

#### 4 小間物忠兵衛

むがしあつたけどよ。

あるどさ、商<sup>あぎね</sup>あえて歩<sup>あり</sup>ぐ婆さまいでつたどよ。その婆さまに一人息子<sup>ひとり</sup>あい  
でつたど。婆さまあ、息子あ働<sup>も</sup>ぐ年ごろなたおんだはげあえ、えあんべのどさや  
て働<sup>も</sup>がへねんねど思<sup>も</sup>て、町ばの大<sup>め</sup>つき店<sup>め</sup>さやたど。その息子あ名<sup>め</sup>めあえ忠兵衛  
いうなであつたそうだ。

その忠兵衛あ、生れがらあんまりえぐはねども、まじめに、正直に店のこどな  
らいならい勤めつたおんだはげあえ、ほの店の旦那さまがらも、他の番頭<sup>お</sup>だちか  
らもめんごがらつて、ひいぎにさつて、だんだん店のごども憶<sup>お</sup>べ、お客がらもひ  
いぎにさつて、ええ番頭<sup>え</sup>んなたけどよ。

婆さま、家<sup>え</sup>にいで商ねしながら、「おれあ家の忠兵衛あ、いつ来<sup>く</sup>んなだべ」て忠  
兵衛あ家<sup>え</sup>さ帰<sup>け</sup>あえてくんばり樂しみんして待<sup>まち</sup>つたけどよ。

そうしていだどさ、油売り婆さま来たけど。ほの婆さま、毎日あつつ村、こつ

つ村て廻てありて、あつつで一合売り、こつつで二合売て歩きしてんなで、忠兵衛家の商ね婆さまど友達であつたどよ。

ほの日も商ね婆さま、油売り婆さまど行き会たおんだはげあえ、商ね婆さま、「おれあ家にあ誰もいねし、この米持てえてたあえで食へつさげあえ、おれ家さ行て泊れ」

て言たど。ほんで油売り婆さま泊たどよ。

ほれ、女子同士だべ。二人あ寝ででおなご話にしゃべたけど。あそこの家あこうだの、こつつの家のだれそれああだのて言てで、商ね婆さま、

「ああ、ああ、おれあ家の息子あ、なんぼなんぼなんども、家さ来ね。いづ来るおんだが」

て、くどぐけど。

「どごさ行つたなや」

て、油売り婆さま聞だば、

「こういうどさ行て、〇〇年なんども、まだ来ねなよ」

て言<sup>ゆ</sup>たば、油売り婆さま、

「んであおれあ家<sup>え</sup>んなど同<sup>おんな</sup>ずだ。娘でもあづけねば駄目だべど思てだ」  
ていうけど。ほんで商ね婆さま、

「んだなよ、おめあえどごがええ娘こあいだどご知らねが」

て聞だどよ。ほしたらば油売り婆さま、

「ほんであなや、こ<sup>この</sup>いうどこの家じゆうに、こ<sup>この</sup>いうええ娘こあいだはげあえ、  
そこの娘こをもらえ」

ど、こ<sup>この</sup>うなただよ。

「ああ、ほだが、ほんであほの娘こもらうごどんして、息子どご呼ばねんね」

「んだが、んであほの娘の絵すがだ描<sup>け</sup>あえでもらて、ほのうづ持てくる」

て、油売り婆さま言うけど。ほんで商ね婆さま、

「ほんであなんとが、ほうしてくだはれ」

て頼<sup>たの</sup>だどよ。ほうしたば、油売り婆さまどこの絵がきに描<sup>け</sup>あえでもらたおんだ  
がそのうづ、その娘の絵姿もてきたけどよ。ほうしてみだば、とでもとでもええ

女子なおんでええ女子なおんで、こごら辺りでなの見るやねええ女子だけだよ。

ほうしているうづん、息子あ来たどこで、

「おめあえもな、いづまでも一人身ひとりでいらんねんだし、こうこういうどこに、こういう娘がいだ。この娘もたらえんねがや」

て、その絵姿見へたら、息子あ、

「おれあ、おつかさんどさ親孝行ごうこうしであえはげあえ、おつかさんがえていうなだば、え」

ていうおんだはげあえ、商ね婆さま、すぐ油売り婆えさまさ行て、

「おれあ家の息子あ、こういうけあ、ほんでどうか中なさ入て、まどめでくんねが」  
て頼たのだど。ほしたら、

「ああ、んだが、んであでげだど同なずだ。んであ、ええどこの人ひと、仲人どに立で  
えがへろ。おれなの駄目なんだ」

て、そして、そつちやこどむぎやて、

「いづまでもその店めにいだて駄目なんだ。むがしから住んでだここさ呼ばらねば

でげねんだはげあえ、まづ暇もらわへでござさよばれ」

て、油売り婆さま教だど。そうしてよばたどで商ね婆さま、

「えま、二十五もなたおんだおん、いづまでも他人の家の番頭してだて駄目なんだはげあえ、早く家さ来て、一人立ちなれ」

て、息子さ言たど。息子も、「んだな」ど思て、ほだらば今までも何年も勤めで、辛棒していだんだし、金も少し溜たんだしど思て、いろいろ小間物仕入で、家さ帰あえて来たどよ。ほうして家造作して嫁もらたんだだけどよ。そうして、店開えで小間物商ね始めだけど。

忠兵衛あ、店の品物あ無ぐなつど遠ぐの町ばまで仕入ん行ぐなだけど。忠兵衛の嫁こあ、ほれごそこら近所になの、いねよだ器量のええ嫁こだべ、んだおんだはげあえ忠兵衛あ、いづでも見ていであえがったあだど。んでも仕入ん時あ、町場さ行てくるまで何日もかがんべ、んだおんだはげあえ、仕入ん出がげつ時あ、めあえにけあえでもらた嫁この絵姿、懷さ入つて持て歩て、見であえぐなつど出して見い見すんなだけどよ。

こんども、まだ、ほの絵姿えいさ懷いださ入いで出がげだけど。そうして握飯にぎましよてござ  
だばしよね坂峠たがでみでだ、峠の高所えさ行て、まず昼間しねんねど思て、握飯ま出だして、  
昼飯ひるま食たど。そうして、昼飯食たどござ、嫁よめござ見でえぐなて、懷いだがら嫁こ  
の絵姿出してひろげで見っただけだよ。

ほうしたば、空さぼつと黒え雲あ出はてきたけど。そうしていろうづほれあ  
たづまづ、巻風んなて吹えできて、あつという間こめん、嫁の絵姿ふつとばさつでし  
またけどは。ほんで、何処どこ落づるおんだべと思て見っただば、ずつと向うの黒塀の  
まわた立派だ家の坪さ、くるくるつとまわで落だけだよ。

「あああさ落ちだ」

ど思て見っただば、六つ七つなるわらすこあ出はてきて、へえづえま（そいつ）拾ひろて  
家さどん入いて行てしまたけどは。ほんで忠兵衛あ、ああ、今いまそこまで行てら  
んね、帰けあえて来てがらもらいん行ぐべ、ど思て、峠越えで仕入えん行たけどよ。  
そうしている内うちん、こんだ、黒塀のまわた長者家えのあんさんが、ほの絵姿みで、  
ほの女子しとき恋ほれでしまて、ほの女子しと欲しぐなてしまたなだけだよ。

そして、この絵姿こごき落ちでくるからにあ、かならずこの近郷の女子だべ、  
ていうごどんなて、まず近郷の人集しとあづべる工面しねんねていうなで、んだら、ふな  
しんべあ立でだら集あづばんべて、何十両も出して、ふなしんべあの役者よばて、何  
時何日いつかふなしんべあすつさげあえ、て近郷近在さ、皆な触れ出したごだどよ。

ほうしたら、それあ大評判なて、われもおれもて、ほれごそ近郷近在がら女も  
男も、子供も年寄としよりまで、押すな押すなて集あづばて来たけどよ。そうすつど忠兵衛家の  
婆さまも、嫁さ、

「おめあえも見であべ、行えて見で来え」

「言ゆたど。ほしたば嫁あ、

「ああああ、おれあ兄あにさまいねどこで行えがんね」  
ていうけど。

「んだたて、隣の嫁も行えぐどこだおの、おめあえも行えげ」

ていうおんだはげあえ、ふなしんべあ見えん行たどごだどよ。

黒塀えの家の兄あにさん、絵姿の女子あ忠兵衛の嫁だなて知らねべ。その女子おしく

ておしくて、ほんで、人あえつぺ集ばつど、ほの女子人あ来ねがど思て、あつみこつみ女子人達ばり見つたどよ。ほうしたば後の方さ、それらす女子人あ来つたけど。ほの女子人のきれたごど、きれたごど、ほの女子人ぐれあえきれた女子なのどごにもいねけどよ。ほんで兄さん、この女子人にそういね、ど思て、懷がら絵姿出して、見ぐらべで見だど。そしたら絵姿どおんなじだけどよ。ほうすつど兄さん、人使て二、三人で忠兵衛の嫁どご、むりむり、ぐんぐんどかつつあら行て、舟さのへで、黒塀屋敷さつで行て、おわかがんしてしまたけどは。

忠兵衛の婆さま、家で一晚寝でまずつだども嫁あ来ねずおん。何なおんだが、二日たても三日暮しても来つづあねずおん。どごさ行たおんだが不思議だおんだ。こんげあえなんなだば、出してやんな、んねがつたて、がおていだけどよ。

そうしてつどき忠兵衛あ帰あえて来たけど。すつど母親、

「忠兵衛、忠兵衛。まづまづ、おめあえどさ申すわけねえごどしてしまたは。ふなしんべあかがたおんだはげあえ、見へであえどもて、行がねていうな、見であえべどもてやたば、三日たても四日たても帰あえて来ねなよ。あああ申すわけね

「ごどしてしまた」

て言<sup>ゆ</sup>たば、忠兵衛は、

「うう、ほつが、分がだ。ほれあおめあえだ悪<sup>わ</sup>りなんね。おれあ悪<sup>わ</sup>りなだ」  
ていうけど。そうして仕入物<sup>おの</sup>、どつたりおろして、どさが走<sup>え</sup>して行<sup>え</sup>ていねぐな  
てしまたけどは。

忠兵衛あ、前<sup>めえ</sup>に絵姿、風にとばさつた時<sup>づぎ</sup>、ほの絵姿、黒塀のまわた立派だ家の  
庭さ落んな見<sup>み</sup>つたべ、んだはげあえ忠兵衛あ、あの絵姿、黒塀の家<sup>え</sup>の誰が見<sup>み</sup>で、  
あんまりええ女子なおんだはげあえ、おれあ家<sup>え</sup>のかがどごおしぐなて、ふなしん  
べあの晩にさらて行<sup>え</sup>たに相違<sup>ちが</sup>ね、ど思<sup>おも</sup>たどよ。

ほんで忠兵衛あ、つらさ墨塗<sup>ぬ</sup>て、年寄みであんして、杖こつで、腰<sup>こす</sup>こまげで、  
ほごの家<sup>え</sup>さ行<sup>え</sup>て、

「ずつと旅して来たおんだども、年寄だなさ、すんけつなおんださげあえ、あり  
ぎ廻<sup>なんざん</sup>んな難儀<sup>なんぎ</sup>なたはげあえ、なんとがここの家で助<sup>たす</sup>けると思<sup>おも</sup>て、かまどの火焚<sup>かまど</sup>ぎ  
が何がさへで、なんとが使<sup>もち</sup>てもらわんねべが。どうが使<sup>もち</sup>てくだはれ」

てなあ、頼<sup>たの</sup>だけだよ。ほしたば旦那、

「ああ、んだがんだが、今<sup>いま</sup>までなんぼがなんぎしたべあ、ああえええ、使うはげあえ、かまどの火焚ぎでもする」

てなあ、忠兵衛あそこの家<sup>え</sup>で、かまどの火焚ぎんて暮<sup>く</sup>したけどよ。

ほうして、木割も上手<sup>じょん</sup>だ、何さへでも上手<sup>じょん</sup>だけど。ほんでほこの家<sup>え</sup>であ、

「何さへでも上手<sup>じょん</sup>だ、ええ人<sup>ひと</sup>やどて、これあまずえがった、金もなんぼも払<sup>は</sup>ういらねんだし、えがった」

て、ほれこそごつつおしておえただけどよ。

ほうしているうづ、風呂さ火焚<sup>くわ</sup>えで、湯のあんべあえ見<sup>み</sup>で「こんだ風呂あわぎあしたはげあえ、どうが入<sup>い</sup>てくだはれ」ていうど、ほこの家<sup>え</sup>のおじいさんが一番早<sup>はや</sup>ぐ入<sup>い</sup>て、ほの次<sup>つぎ</sup>あ、おばあさん来<sup>き</sup>て、ほの次<sup>つぎ</sup>あ兄<sup>あに</sup>さん入<sup>い</sup>て、ほの次<sup>つぎ</sup>あ、兄<sup>あに</sup>さんの嫁<sup>よめ</sup>あ入<sup>い</sup>んなだけだよ。

忠兵衛あ、ほれ聞<sup>き</sup>で、今夜<sup>こにや</sup>こそ兄<sup>あに</sup>さんの嫁<sup>よめ</sup>あなんと嫁<sup>よめ</sup>だが見<sup>み</sup>ねんねていうなで、板<sup>い</sup>の隙<sup>ひま</sup>間<sup>ま</sup>こがら見<sup>み</sup>つたど。ほしたば、やつぱりおじいさん来<sup>き</sup>て、おばあさん来<sup>き</sup>て、

兄さん来たけど。忠兵衛あ、こんだ嫁あ来んなだなど思て、待じっただよ。そして  
たばやっぱり嫁あすわすわど来たずおん。忠兵衛あ、眼皿まなくこんして見っただば、やつ  
ぱりおわえ（自分の家）のかがだけだよ。ほんで忠兵衛あ走して行て、

「ああ、やつぱりお前めえが。やつぱりここに居えであえったが」

て、かがどごしめだど。かがもどでして、

「兄あんさまが、ああ、兄あんさまが。えぐ来て呉くった」

て、二人あ、そごで泣したりぎながら抱あぎ合たけどよ。ほうして、嫁あ、

「おれあ、ここの家えの兄あんさんにさらわつで来だ。ねげんべと思たども、逃ねげらん  
ねくていだなだ。兄さまどさ申すわけねくて、毎日泣えで暮こしつた。おれあ兄さ  
まさ申すわけね体んなてしまたはげあえ、どうが殺して呉ころは」

て泣ぐけどよ。忠兵衛は、

「ああ、ああ、これあお前めえ、えぐねな、んね。おれあえぐねなだ。絵姿風にせも  
飛ばさんねば、こんたごどんならねあであえった。まづ憎えな、ここの家の兄さ  
んだ。夜んま寝っだどご殺して呉くえる。兄さん布団あなんと布団だや」

て聞だば、「おれあ布団あ菊の花つっだあだし、兄さん布団は、こうこういう布団だ」て、教だど。

ほうして次の日、まさがり、えがえがどといで、夜中んなたら殺して呉えんべどもて、待じっだどよ。ほうして夜中んなつど、忠兵衛あまさがり持たて、奥の部屋さ入て行て、こつあ兄さんだなど思て、まさがりでだきつときてねげだど。んでも、兄さん首きつどて、まづがて、おわかがの首切てしまたあだけどよ。

兄さん物音で目さまして見たば、おわそばさ寝った姉こあ首もがつて、辺りあどろどろど血の海だけど。そうすつど、誰だかれだて、大さわぎなたべ。ほうしているうづん、誰が、

「火焚ぎさんすけあいね。んであ火焚ぎじさまだべ」

て、大さわぎして探したども、火焚ぎじいさまいねけどは。

そしたら兄さん、

「ああ、ああ、これあわだすあえぐねなだはげあえ、騒ぐなさわぐな。自分がしとのか盗たなだおの、自分がえぐねなだ。何とがほこの家さがして、ゆわげね

んね」

て、引取しとたので、うんと探さへだど。ほうしてようやく探したどこで忠兵衛だ、

小間物忠兵衛だて分がて、兄さん、忠兵衛あ家えさ行えて、

「ああ、ああ、この度のごどは、みなわだす悪わりなで、ほんとん申すわけねえごどしてしまいあしたは。どうが許してくださいなはれ」

て、忠兵衛あどさゆわけで、ほうして、

「これあ少すこすだども、どうがこれで供養してくだはれ」

て、お金どつさり置おえで行えたけどよ。とんぴん からんこあ ねつけどは。

（集成二二〇「絵姿女房」）

## 5 化げおのむがす

むがすあつたけど。

旧村（真室川町及位）に甚助ていうどやいだけど。甚助あ毎日、庭さふえご置えで、村々まわて、鍋さ穴開<sup>え</sup>つたり、かまこき穴開<sup>え</sup>たり、耳あ欠げだ、つるあ折つだなていうな集べできて、ほれいがで（鑄かけ）暮してんなだけど。ほうして毎日ふえごんどごさ寝<sup>え</sup>まて、とごひこ、ふうふう、とごひこ、ふうふうて、ふえご動<sup>えご</sup>がしていだけど。

ほうして暮<sup>づ</sup>してゐる時、どやのかが病氣<sup>づき</sup>んなて長わずれあで寝<sup>え</sup>てしまたけどは。甚助あ医者だ薬だてあづがたども、あんべえぐねくて、とうとう死にそなたけどは。ほうして死にそなたば、ほのかが、

「おれあ死んだら口赤<sup>くち</sup>ぐぬて、眼<sup>まなこ</sup>のあだり銀いろんぬて、仏壇さかざたまま、埋<sup>ん</sup>めねでごろ」

て、遺言して、とうとう死でしまたけどは。

ほんで甚助あ泣ぐ泣ぐかがどご棺<sup>へ</sup>さ入<sup>い</sup>で、和尚さんどご連<sup>つ</sup>できて、おがてもらたど。ほうして、かがに遺言さつたとおり、口赤<sup>くち</sup>ぐぬてくつで、まなぐのふづ銀いろん塗てくつたど。

ほうして、毎晩おがでだば、ある晩、ほの棺箱あ、みつみつという音あすつけど。甚助あどでして、おかねぐなて、庭のふえごんどき寝で居だど。ほうしてみつだば、

「てでごあいだが。てでごあいだが」

て、棺箱の中というなだけどや。甚助あおかねくて、

「ごこんいだ。ごこんいだ」

て言いながら、とこひこ、とこひこ、ふうふうて、ふえご動がしつたど。

ほうすつごこんだ、死だかがあ、鬼婆んばんなて、棺がら出はてきたけど。まなぐぶづば銀いろんして、口ばあげやぐしてだべ。ほうして大つき口えで、

「てでごあいだが。てでごあいだが」

て、甚助あいだほさ来んなだけど。甚助あおかねくておかねくては、寝まてらんねくて、逃げだど。んでも、ほの鬼婆んば追て来んなだけどや。

ほんで甚助あ、となりの家さ逃げで行て、

「今、おら家の死だかが、鬼婆んば化げで追てきたはげあえ、どうがどさが隠し

て呉<sup>こ</sup>ろ」

て言<sup>ゆ</sup>たば、

「んだがんだが。ほれあおかねごった、みんな鬼の豆くて、布団かぶて寝った方<sup>ほ</sup>あえ」

て、ほこの家<sup>え</sup>であ、みんなどき鬼の豆食<sup>か</sup>へで、布団かぶて寝ったど。

ほうしたば、髪やしやしやどさへで、おかね顔<sup>つら</sup>しった鬼婆んば、

「てでごあいねが、てでごあいねが」

て、手前<sup>め</sup>あえさ出して来て、布団かぶて寝ったな、一人<sup>ひとり</sup>一人、くふん、くふん

てけあえで、

「これあてでごんね、これもてでごんね」

て、みんなどこかぐけど。みんなおかねくて、布団の中で、ぶるぶるふるえっただけどは。

ほうしているうづん、ほごさ猫あ来たけど。ほしたば鬼婆んば猫あどごけあえんだけど。猫あ鬼の豆<sup>か</sup>なの食ねべ。んだおんだはげあえ鬼婆んば、猫あどごしめ

で、

「でござこれだ」

ていうど、いぎなりほの猫あどご、がりがりむしやむしやど、食くてしまたけどは。ほうして猫あどご食くうど、鬼婆んば、どさが行えてしまて、ほれきりいなぐなてしまたけどは。

んだはげあえ、鬼の豆くうど魔除げんなるはげあえ、鬼の豆づあ食くうおんだど。  
とんぴん からんこあ ねつけどは。

## 6 天狗むがし

むがしあつたけど。

しよねが おく

むがし塩根川の奥おくさな、米吉よねきちていう野郎こあいであつたど。秋んなて、ほの年あ栗あえつぺなた年であつたど。んだはげあえ野郎こあ、ががに

「米吉、米吉。裏山えさ行て栗拾えろてこえちや」

て言ゆわつて、おわへながえつぺなるみでだ、大つきぶんどかはげごしよて、裏の山さ登えて行たど。

ほうしたら、栗ぬ木ぎさなんだが、ばさつとした物ものひつかがつたずおん。ほんで野郎こあ、ないだおんだべ、おがしおんだごと、ど思おもてえつくん見たば、鷹の羽みであえだなで作た、扇うづわみであえだけど。あんまり不思議だおんださげあえ、ほの栗ぬ木さ上がて取てみだら、やつぱり扇であえんたはげあえ、ほれであおえでみだら、唯のうづわより、うんと風あ出つけど。ほうして栗あぼだぼだと落おちてくつけど。

野郎こあ、ほれ天狗の扇だ、なて知らねべ、あおぐど栗あぼだぼだ落おちでくん面白いおもへて、野郎こあ、あおえであ拾い、あおえであ拾い、ほの大つきはげごさ、えつぺ拾てきたけど。ほうして家えさくつどほのうづわ、つあつあにとらえつどもて、裏の木小屋さかくしつたど。

次の日、表の沢んどごで、米吉あ顔面つら洗てだば、齒一本えっほんはんてね足駄へあえだ

鼻のなんげ赤え顔面<sup>あけつら</sup>しった天狗さま来たけど。ほうして、米吉あどご見つけで、

「こらっ野郎こ。んつあ昨日<sup>きん</sup>、裏山で天狗の扇拾<sup>さん</sup>たべ」

つけど。米吉あ知らねふりして、

「ほんたおの、おら知らね」

て、嘘<sup>ずほ</sup>こえだど。ほうしたば天狗さまごへあえて、

「この野郎こあ、嘘<sup>ずほ</sup>こえだな。あのうづわ持てこねごつたら、やづ刺ぎんしてく  
えんぞ」

て、おつかね顔面<sup>つら</sup>していうけど。んだおんだはげあえ野郎こあ、おかねぐなて、  
ぐえら走して木小屋<sup>え</sup>さ行くど、隠<sup>え</sup>しった扇持てきたけど。天狗さまあ米吉あどか  
ら、ほの扇、ぐえっとひなくて、

「この野郎こあ、嘘<sup>ずほ</sup>こえでえぐね野郎こだ」

ていうど、ほの扇で、米吉あどご、ごえごえどあおえだど。ほうすつどごうご  
う風あ出て、米吉あ、こしぎ山の上<sup>ゆえ</sup>の方さ飛ばさつてしまたけどは。

ほうして、こしぎ山の上あだりまで飛ばさつて行<sup>え</sup>たら、こんだ大つき驚あとん

できて、米吉あどご大つき爪で、ぐえつとつかで、大沢の奥の鍋倉山んどさ来たば、米吉あどご、どえら落してしまたけど。ほれあまだ鷲の巣んどさ、すごであえま大つき蛇あ上ができて、鷲のひよこ取つどごだけど。んだはげあえ米吉あどさなのかもていらんねがつたべ。ほんで米吉あどごぐえら落したあだべ。米吉あ、鍋倉の岩<sup>がん</sup>けつ<sup>つ</sup>のてっぺんさ落さつだども、命あ助かたけど。

ほうして、米吉あ頭の上の木んどごであ、ばさらばさらて、鷲ど蛇あ、死ぬ<sup>いぎ</sup>が生つかの大けんかだけど。

米吉あ、えまのこめあえん逃げ<sup>ね</sup>ねんねど思て、あだり見だど。ほうしたば、少<sup>すこ</sup>分離つだどさ、なんだがぜえぶん光るおの落ちつだけずおん。米吉あなんだべどもて、ほれ拾てみだば光る石で、にぎりこぶすのほどあんなだけど。米吉あ、

「これあ珍らす石だ。これだば拾て行<sup>え</sup>がねんね」

というなで、ほの石、懷<sup>しんろう</sup>さ入つで、こんだ、ほのがんくら、つたなの小柴なのさだぐづえで、足なのあつこつたくて、ほの岩けづの岩山、ようやつと降りできて、ふうふうて言<sup>ゆ</sup>いながら沢の水飲<sup>の</sup>で、やつとまづまづど思ていぎついだど。

なんぼが恐ねがったべ。<sup>おか</sup>

ほうして、おわ家あどつつだべと思て、<sup>え</sup>辺り見だたて、沢ん中だべ。あたりあ山ばりだおんだおん、分るわけあねべ。しかだねんだし、沢下りしてえだら、どごが家のあつどさ行ぐんねべがどもて、沢下て行たど。<sup>え</sup>んだて鍋倉山の頂上からだべ、とでも陽のあるうづなの、家のあるどこまでなの行げねんだおん。ほのうづ途中で陽あ暮つてしまたけどは。

米吉あ、今朝からなんにも食ねべ。<sup>か</sup>腹だてすぎだべ。ほれさ暗くなてきたべ。米吉あ泣ぎであえぐなて来たけどは。んでも、もう少す行たら、家ああるんでねべがと思て、<sup>も</sup>びっこひぐみであえんして行たど。ほうしたば、先さぼつんと、灯りあしとつつめつけど。米吉あよろこで、ほの家さ行て、<sup>え</sup>

「おばんです。おばんです」

て言たば、<sup>ゆ</sup>婆さま出はてきて、

「今ごろ、<sup>えま</sup>なんだや」つけど。ほんで米吉あ、<sup>みづまよ</sup>

「道迷てしまて、暗ぐならっただはげあえ、泊めでもらわんねべが」

て言<sup>ゆ</sup>たば、婆<sup>ば</sup>さまあ、

「道迷<sup>みちま</sup>たなが。んだらなんぼがくたびつだべあ、腹もへつたべあ、まずまずへれ」  
つけど。米吉<sup>めきち</sup>あ、ほうすんべづん言<sup>ゆ</sup>わつで、どつかどして、ほごの家<sup>いへ</sup>さ入<sup>い</sup>あえて、ままも御馳走<sup>ごちそう</sup>なて、腹もくつつぐなて、寝<sup>ね</sup>へでもらたど。

ほうして寝<sup>ね</sup>つだば、夜中<sup>よな</sup>なんだが、座敷<sup>ざしき</sup>の方<sup>かた</sup>でばりばりて、すこであえま火でもたぐよんた音<sup>おと</sup>あすつずおん。米吉<sup>めきち</sup>あ、火事<sup>かじ</sup>でもなたあだがどもて、はつと目さめたけど。ほんで、そつと座敷<sup>ざしき</sup>の方<sup>かた</sup>見たば、髪<sup>かみ</sup>やしやしやどした鬼婆<sup>おにば</sup>んば、ゆるりさ大<sup>おほ</sup>つき鍋<sup>なべ</sup>かげで、すこでま火<sup>か</sup>たぎながら、傍<sup>はた</sup>さ俎板<sup>そばん</sup>おえで、びがびが光る包丁<sup>ほうちょう</sup>の刃<sup>は</sup>さ指<sup>さ</sup>あでがて、

「これだば、あの野郎<sup>やろう</sup>こあ首<sup>くび</sup>なの、えつぺんで切<sup>き</sup>れる。よしよし腹も裂<sup>ひ</sup>えでが。なんぼが、んめあえべな」

て、一人<sup>ひとり</sup>ごと言<sup>ゆ</sup>つたあだけどや。米吉<sup>めきち</sup>あおかねあえぐなて、おかねあえぐなて、がだがだどふるえできたど。

ほんで、今逃<sup>いま</sup>げねば、鬼婆<sup>おにば</sup>んばに食<sup>か</sup>つでしまふはど思<sup>おも</sup>て、はどめあえの戸<sup>かど</sup>から

り開いで、沢の下の方さどんどん命がげんなくて逃げだずおん。ほうすつど、鬼婆んば、はどめあえの開ぐ音聞で、

「野郎こ逃げだな。逃げだて駄目だ。こら待てえ」

て、追かげできたけどやあ。米吉あおかねべ、一心なて走して逃げだども、鬼婆んばはえおんで、ほの内ん、かつがれそんなてしまたけどは。ほうすつど米吉あ、道ばだの石ころ四つ五つ拾うど、鬼婆んどさ、

「この畜生。この畜生」

て言いながら、ばえんばえんどぶからでやたど。ほうしたば鬼婆んば、

「いで、いで。ああいでちは」

ていうど、ほごさしやがまてしまたけどは。米吉あ、このこめあえんだ、ていうど、まだどんど走したど。んだて鬼婆んばだおんだおん、あれあえおんで、まだ、

「この野郎こ、待てえ」

て、追かげできて、またかつがれそんなて来たけどは。ほんで米吉あ、おかね

くておかねくて、まだ石ころぶからむかんじよして、道傍見だども、石ころあさつぱりねけど。米吉あ、

「ああ、困たちや困たちや、鬼婆んばに食<sup>か</sup>つでしまうは」

ど思<sup>も</sup>ていだら、懷<sup>しじろ</sup>さ入<sup>へ</sup>あえた光る石こあ、懷<sup>め</sup>ん中で、

「おれあどご見<sup>め</sup>へろ、おれあどご見<sup>め</sup>へろ」

て、叫<sup>さが</sup>ぶけど。んでも、米吉あ、石ころ入<sup>へ</sup>だてなんずんなる（どうなる）おんだが。どもていたら、石ころあまだ、

「早ぐ、おれあどご見<sup>め</sup>へろ。早ぐ早ぐ」

ていうおんだはげあえ、米吉あ、懷<sup>しじろ</sup>さ手入<sup>へ</sup>で、石こつかむど、「ほらっ」て、鬼婆んば方さ、つだしたど。ほうしたば鬼婆んば、「あっ」て叫ぶど、ほごさしやがまして、動<sup>え</sup>ごがねぐなてしまたけどは。米吉あ、こん時<sup>とき</sup>だていうど、まだ一生<sup>しよ</sup>けんめんなて走したど。ほうしたば、鬼婆んば迫<sup>お</sup>てこねけどは。米吉あ、

「ああ、おれあこの石こん助けらった。大事しんねんね」  
て、ほの石こおがんだけど。

ほうして、すばらくいたら、村見できたけど。ほんで米吉あ、ようやぐどつかどして、えたば、田の野手くき刈ってだ人あいだけど。ほんで、ほの人さ、

「及位の方さ行ぐな、どつつですべ」

て聞だら、村の人あ、

「この道、まっすぐ行げばえなだ。ほして真室川さ出はたら、まだ聞げ。ほんでもおめあえどから来たおんだや。まづ泥だらけんなて」

というけど。ほんで米吉あ、

「及位のしよねがの奥がら、天狗さまに吹つとばさつで、この奥の山がらようやぐ来たあだ」

て言たば、ほの人あどでして、

「ねえだどや。天狗え吹つとばさつで、えぐ助かたおんだ。このずっと奥だば鍋倉だべあ、あそごらあだりにや、鬼婆んばいっさげあえ食れるいうなで、村の人づあ誰も寄つつがねあだ。まずえぐ鬼婆んばに食んねがったごと」

つけど。ほんで米吉あ、

「んだ、ゆべな、鬼婆んばに食れつどごであえつたなよ。逃げだば追てきたはげあえ、石ころぶからで、ようやぐ逃げで、今こごまで来たなよ」

て言たば、

「ほんであえがつた。今こご来たあだば、まだ朝飯も食ねべあ、おれあ家さ行ごて、ほの人へ連で行てもらつて、朝飯ごつとおなて、しよねがいりだば晩方はんてつがねべあ、どて、にぎりまままで持がへでもらて、助けでもらたど。」

ほうして、ようやつと暗くなてがら、おわ家さつだけど。ほしたば、家の人達あびつくりして、

「まずまず、どごさ行て来たおんだや。村の人達あ、おめあいなぐなんべし、ほれさ化げおのあ出はて、姉こ一人あしたの晩、入りの大杉んどさ連で来え、ていうべし、んつもほの化げおのにさらわつたなんねが、て大さわぎしつたどごだ。まずまず、んつ（お前さん）ばりもさらわんねくてえがつた」

て、きがへだけど。

ほうして、村の人達あ、どこの家の姉こ出したらえべて、みんな集ばて大さわ

ぎして相談したども、誰だておわの家の娘出すな嫌だべ。んだおんださげあえ、なんぼしたて決まらねけど。ほんでとうとうくづびぎしたずおん。ほしたば、村のはずれの与兵衛家のきぬていう姉こあどさ当たけど。ほんで与兵衛家であ困て、ただ家内中で、泣で夜明したけどは。

ほうしてな、ほの晩暗くなてがら、村の人達あ、まなぐ泣ぎはらしたきぬどご送て、入りの大杉んどごまで行たど。米吉もみんなの後さついで行たど。ほして大杉んどさ行たば、化げおのあ、ほれこそ目光らへで、ううんてうなりながら、「姉こ連で来たが、連できたら早く出へ」

て、われがねみであえだ声出して叫ぶけど。ほうしたば、ほの声あ、米吉あ懐さへった石こさひびて、びびてなつけど。米吉あ、あつと思て、懐の石こさ手やたど。ほしたば、ほの石こあ、

「米吉、米吉、おれどごあの化げおのさぶからめ、ほうすつど化げおのあ、必ず死ぬはげあえ」

つけど。ほんで米吉あおかねおんだはげあえ、ふるえながらも、ほの石こ懐が

ら出ずど、思い切り化げおのさ、ぶからでやたど。ほうすつど、んまぐ当て、化  
げおのあ、「ぎやあつ」ていうど、ぶつたおつで死でしまたけどは。ほんで、ほれ  
見で村の人達したつあ、たまげでたまげで、みんな目丸まなぐこぐしったけど。とんぴんか  
らんこあ ねつけどは。

(集成二四〇「三枚の護符」系)

## 7 聾 え ら び

むがしあつたけど。

あるどさな、田がら畑がら山まで、えつぺあえ持た金持だ長者いだけど。ほう  
して、ほえごの家にあ、わがぜえ（若勢）がら女人達おなこしたつ三十人も使てる家えであつたど。  
ほんで米なえの倉さ、ほれえこそ数たかじえでならねくれあつまてるおんだけど。

ほの長者家えにあ息子えあいねくて、子供えづあ娘たつた一人ひとりばんであえつたど。ほ

んで長者あ簀もらわねんねど思たど。んでも、ただの簀であ駄目だ、頭のえ、働  
ぎおのんねば、この身上持て行かんねはげあえ、さまざまためてがらもらわね  
んね、て、いだけど。

ほんで、ほのためすずあ、まず倉さ積んだ米だら何俵あつが、たばこ二服吸う  
うづん、勘定<sup>かんじょう</sup>するてだけど。ほれがらな、二間<sup>にま</sup>ばりある下の川、足ぬらさねで渡  
れていうなだけど。ほれがらなあ、もう一づ<sup>しづ</sup>あ、千刈<sup>せんぎ</sup>ともでの畔、鳥の足あどつ  
けねで、一日で塗れていうなだけどや。

ほうしたば、おれあ簀んなる、おれも簀んなるて、若あえおの来たけど。んで  
も倉さつまつた米だら、半分も勘定すねうづん、たばこ二服吸わつですまて、駄  
目だけど。ほれがら、まだ、次々ど若あえおのだあ来てためしたども、誰もみな  
米勘定で引かがてしまて、二番目のためすまで行ぐ<sup>え</sup>おのあいねけど。何人来ても  
だめで、すばらぐあどあ若あえおので、おれあ簀んなつであえていう者<sup>おの</sup>あ来ねけ  
ど。

ほうしていだば、ある時<sup>とき</sup>、若者<sup>おの</sup>あ来たけど。ほの若者あ、体もがつつりして立

派だし、見たどりこも利口そだ、ええ若者だけど。ほの若者あ、まづ米倉こめくらの米俵何俵あつが勘定ゆしてみろて言わつで、倉の方えさ行たば、長者の娘あ、裏の方で子守こんもりしたけど。ほうして、子守唄うだつたけど。ほの子守唄きつたば、

倉の米だら勘定へ 勘定へ

十俵つ積とおまで 十で百、十で百

百つ十で千俵 十で千俵

ねろねろや ねろねろや

て、歌つたあだけど。ああ、おれどさ教おへつどて歌つたあだな。て分がたけど。

ほお、十俵つ積つまでんなが、んであ十で百俵だずんだ、んであ百俵つななぼあつがかんじよへば、ほんたおのあすぐわがる。ど思もて倉くらさ行たど。

ほうしたば、長者先ん来て待じつだけど。ほうして、キシエルさ煙草つめでいだけど。ほして、若者あ行たば、ほれさ火つけで「ほらつ、ええぞ」つけど。ほうすつど若者あ、百俵つずななぼあつが、走してありて勘定したど。ほしたば千五百俵あんなだけど。ほんで、

「千五百俵ありあすな」

て言<sup>ゆ</sup>た時<sup>づぎ</sup>あ、長者<sup>ちやう</sup>やつと一服吸<sup>す</sup>つたばかりだけど。ほんで長者<sup>ちやう</sup>あ、

「よしよし、えぐ勘定<sup>かんてい</sup>した」

ていう<sup>い</sup>けど。ほうして、

「兄<sup>あに</sup>んつあ、兄<sup>あに</sup>んつあ、こんだ、明日<sup>あした</sup>、下の川<sup>したのかわ</sup>、足ぬらさねで渡<sup>わた</sup>てみる」

つけど。ほんで若<sup>わ</sup>者<sup>しや</sup>あ、まず、一つ出来<sup>け</sup>だども、下の川<sup>したのかわ</sup>足ぬらさねで渡<sup>わた</sup>れ、言<sup>い</sup>わつだて、二間<sup>ふたま</sup>もその余<sup>よ</sup>もある川<sup>かわ</sup>だおん、なんずして渡<sup>わた</sup>たらえがべ、ど思<sup>おも</sup>て、ほどほど困<sup>こ</sup>でだけど。

ほうして次の日<sup>あした</sup>、まず川<sup>かわ</sup>んどさ行<sup>い</sup>てみんべど思<sup>おも</sup>て、裏<sup>うら</sup>さまわたば、まだ娘<sup>むすめ</sup>あ子<sup>こ</sup>守<sup>まも</sup>りしながら唄<sup>うた</sup>うだつたけど。ほんで、まだ、だまって聞<sup>き</sup>つたば、

下の川<sup>したのかわ</sup>跳<sup>は</sup>ねるにや

なんげあえ棒<sup>ぼう</sup>でしと跳<sup>は</sup>ねだ

なんげあえ棒<sup>ぼう</sup>でしと跳<sup>は</sup>ねだ

ねろじゆは ねろじゆは

ねろねろや　ねろねろや

て歌つてただあけど。ほんで、ほの若者あ、「ああほつか、川のまん中さ、長げあえ棒つで跳ねればええ勘定だ」て分がたけど。ほんで、ほごらあたり見たば、そがぎする長げあえ棒ああつけど。ほんで、川のそばん居た長者んどさ行て、ほの棒、川のまん中さつで、たあだしと跳びん跳でめへだど。ほしたば長者あ、

「ほう、えぐ考げあえだおんだ。まず、これでしたつつ出がしたな。んでああと一っだ。まだ、明日、こんど千刈ともでの畔一日で塗てみろ。んでも、鳥の足あどつけつど駄目だぞ」

つけど。ほんで、ほの若者あ、これだば二日も三日もかがんべあ、ほれも塗れば片っ端がら、鳥あつぶくいであえてありてしまふべあ、はあで、何たごどして塗たらえべど思て、困まていだけど。

ほうして、困ては、裏の石垣さ腰かげで、工面したけど。ほうしたば、晩方しめあん、まだ、娘あ裏口んどごで、こんもり唄うだつたけど。なんだごど歌うだつたおんだべど思て、まだ、だまつて聞つたば、

千刈ともでの 畔ぬるにあ

朝おりめあえに 畔けずれ

ともでひるみしくて土つけろ

ばんかだしめんくろなでろ

ほらねろ ほらねろ ねろねろや

てうだったなだけど。ほんで若者あ、ああ、あの娘あ、まだおれどき教へでくつ  
だあだなど思ていだど。

ほうして、次の日んなつど、ほの若者あ、朝まうす暗あうづん起きで、ともで  
さ行て、田の畔けつたど。ほうして、朝みしもおそこそして、まだ、けつて、昼  
みしめあえにあ、削り上げで、昼みし後もでくて、畔さ土つけでえたど。ほう  
して晩方しめあえん、烏あ夜上がりしたどご見で、畔でらでらど撫でで行たど。  
んだおんだはげあえ、田の畔さ、さっぱり烏の足あどつがねで、千刈ともでの畔  
ぬり上げだけどは。ほうして、暗くなてがら夜上がりして、長者どさ、

「でかして来たはげあえ、見で呉ろ」

て言たど。ほんで、長者見ん行てみだば、千刈ともでの田の畔あ、烏の足あど一  
づつがねで、みな出来っただけ。

ほんで、長者たまげでしまたけどは。んだおんだはげあえ、この若者だば、智  
恵もあるし、働ぎ者でええ若者だ。これだばこの長者のあどとりんでげるていう  
なで、娘の簀んしたけど。ほんで、ほの若者あ、長者の簀えなて、仕合せん暮  
したけど。とんぴん からんこあ ねっけどは。

(集成二二八「娘の助言」)

## 8 馬鹿簀ばなし

むがしあつたけど。

あるどさな、ほれこそ馬鹿だ男あいであえつたど。ほの男あ嫁こもらたけど。  
ほんで、節句<sup>へく</sup>ん<sup>く</sup>なて、嫁の実家であ初節句だはげあえて、簀あどご招ばたど。

ほんで、聾あ初節句で行ぐ時<sup>え</sup>あ、なんずん言<sup>ゆ</sup>て行たらえべ、ていうなで、誰あ  
どからが聞<sup>も</sup>がねんねど思<sup>え</sup>て行<sup>え</sup>たど。ほうしたば、向うの畑に百姓あいで、種蒔ぎ  
したたけど。ほれで、馬鹿聾あ、ほの種蒔ぎしたたき、

「聾あ、初節句で行ぐ時<sup>づぎ</sup>あ、なんずん言<sup>ゆ</sup>て行たらえべ」

て、大つき声で聞<sup>き</sup>だど。ほしたば、ろぐに聞<sup>き</sup>げねおんだはげあえ、

「この種でもおしなが」

ていうけど。ほんで馬鹿聾あ、

「ははあ、こういう時あ、この種でもおしながていうどええおんだんだな」

どもて、嫁の家<sup>え</sup>さ行<sup>え</sup>たど。ほうして、座敷さ上がつど、

「この種でもおしなが」

て、百姓あしたみであえん、手あげだけど。ほれ聞<sup>き</sup>ぐど、嫁の親達<sup>たつ</sup>あ、どてし

てしまて、こげあえ、馬鹿だ聾さ娘くえんな、んねがつたど思<sup>おも</sup>たども、まず、し

かだね、御馳走<sup>つぎ</sup>してけあえしたけど。

ほれがらある時<sup>つぎ</sup>、嫁の実家で、新<sup>あた</sup>し家建<sup>え</sup>でだはげあえ、て聾あどご招<sup>ま</sup>ばたど。

聒あ行く時、村のものしりんどさ行て、なんずん言て行たらえべて、聞だど。ほしたば、

「まずな、大変えぐ出来あしたな、て言いながら、床の間がら、あつつこつつま  
んべんなぐ見で、節のあつどご見つけだら、この節んどごさ、お掛図でもかげつ  
どえんだなて、いうおんだ」

ていうけど。ほんで馬鹿聒あ、嫁の家さ行て、床の間がらあつつこつつ、まん  
べんなぐ見でがら、

「大変立派んでげあしたな。んでも、この節んどさ、お掛図でもかげつど、なお  
えげあすべな」

て言たど。ほんで、嫁の親達あ、

「馬鹿だどおもたら、まんぎらの馬鹿んねな」

ど思て、ごつつおしてよごしたけど。

ほれがら、まだ、すばらぐすつど、嫁の家であ、こんだ馬こ買たはげあえ、み  
んきてころて言てよごしたけど。ほんで、馬鹿聒あ、こんだなんとご言て行た

らえがべ、誰がさ聞きであおんだと思たども、聞しぐ人あいねおんだはげあえ、聞がねでえたど。

ほうして、嫁の実家さ行たべ、ほしたら馬めへらつたべ、ほんで、なでだりさすたりして、うしろさ廻たけど。ほん時馬つぎさ虻あきたけど。ほんで、馬おっぱ尻尾振たべ、んだおんだはげあえ馬のけつつ穴見だけど。ほうすつど馬鹿髻あ、

「たいへん立派だ馬ですな。んでも、ここさお掛図けずでもかけでおぐどえんだな」て言たど。ほんで、嫁の親だづあ、これあよつぽどえ馬鹿だおんだなて思たど。

ほうしてるうづん、晩方なて、ごつとおなるごどんなたけど。ほうすつど嫁あ、  
「兄んつあ兄んつあ、よげだごどあ、けつして言うなよ。おれあひつぱたら唄えはえし、おれあつねたら踊れ。あどあよげだごどしねで見でろよ」

て言ゆてきがえだど。ほしたば馬鹿髻あ、  
「んだが、んだが」て、大人しぐしたど。

ほうしてるうづん、ごつとおあ出はてきて、お吸物も出はてきたべ、ほしたば馬鹿髻あ、ほれ食ったけど。ほうして、

「この味噌汁あ、んめあえごど、んめあえごど」

てほめだけど。ほんで嫁あ、ほのあどなに言われつが分らねど思て、簀あ袖ひ  
ばたど。ほしたば馬鹿簀あ、袖ひつぱらっだおんだはげあえ、てつきり唄えてだ  
ど思て、ほれごそ下手だ唄うだい始めだけど。ほんで嫁あ恥がすおんだはげあえ、  
こんだ簀あどごつねったど。ほうすつど簀あ、これあ踊れていうなだべどもて、  
踊りだしたけど。ほれもぶかつこ踊りだおんださげあえ、嫁の家であ、こげあえ  
馬鹿だ男さ、娘くつでらんねていうなで、ほの馬鹿簀あ、たあだ嫁とらつでしまつ  
たけどは。とんびん からんこあ ねっけどは。

(集成三三六、三三九、三四四「簀の挨拶」「馬の尻に札」「謠の合図」)

## 9 蛇じゃんであえんなた与蔵

むがすあつたけど。

むがすな、鮭川の奥ん、まんがりていうどごああって、ほごの村に与蔵しとていう人あいであえつたど。

与蔵あ、毎日山えさ行て炭焼なぎして暮なしていであえつたど。ほの村に作治しとていう人あいで、炭焼なぎ仲間なで、いづでも与蔵あそばで仕事してんなだけど。んだはげあえ、昼飯みしん時つぎなの、いつも二人あ、一づん食うなだけど。

ある時つぎ、二人あ、奥の庄内しょうねの境さげさちつけあえどこの、沼しとのそばで炭焼なぎしつたけど。ほうして、ほの日あ、作治あであえぶ（大分）下の方で炭焼なぐ木伐あへつたけど。ほのうづん、昼まあちけあえぐなたおんだはげあえ、与蔵あ、沼で汗流あへしてくんべどもて、沼んどさ行えたど。ほしたば、沼すこの少す尻の方で、じゃぼんていう音あすつさげあえ、行てみだば岩魚いわないだあだけど。ほんで、与蔵あ、ほの岩魚いわなぼて、石さ入へたどご手づがみんしてとたど。ほうして、もといだんねべがどもて、さがしたら、ほの沢の大つき石さ、四匹も五匹も入へつたけど。与蔵あ喜よろこで、これだば昼飯みしん時つぎ、作治あどさもかへるえどもて、串ささしてあふたど。

ほしたば岩魚だんだん焼あげできて、ええ匂えあしてきたずおん。与蔵あ昼飯みし

めあえだべ、んだおんだはげあえ、ほの岩魚の焼げる匂えけあえんだば、腹ぐうぐうて鳴てきたけど。始めのうづあ食いであえな我慢したども、ほのうづん我慢でげなぐなてしまて、しかだね、作治あこねはげあえ、来るまで一つだけ味見つが、ていうなで、一匹食てみだど。ほしたば、んめあえおんで、んめあえおんで、とうどう我慢でげねぐなてしまては、一匹食い、二匹食い、とうどうみな食てしまたけどは。

ほうしたば、のどかわえできて、のどかわえできて、水のみであえぐなて、沼さ口<sup>くち</sup>つけで、がぶがぶど飲<sup>の</sup>だど。ほしたばなんぼ飲でも、これでえ、ていうごどあねあえくて、ほれこそ息つがず飲<sup>の</sup>だけど。ほうしたば、頭<sup>お</sup>さ角あ生<sup>お</sup>えできたけど。ほうしるんうづん、こんだ、みるみるうづん、与蔵あ蛇<sup>じゃ</sup>んであえんなたけどは。

ほんで、与蔵あ、どでして、

「あらあら、困またちや困またちや、おれあ蛇んであえんなてしまたは。なんずんしたらえがべ。これだば、家<sup>け</sup>さも帰あらんねぐなてしまたは。かがやわらす達

どさも行がんねぐなてしまたは。困<sup>えま</sup>またちや困<sup>く</sup>またちや。今作治も来んべあ、このめくせあえ姿だば、作治あどさも見<sup>め</sup>へらんね」

ていうど、どぼんと沼の中さ入<sup>へ</sup>あて行<sup>え</sup>てしまたけどは。

ほうしたば、作治あ、下の方が炭がまんどさ、上がて来たけど。ほうして、与蔵あいねおんだはげあえ、昼まんなたべあ、与蔵あどさ行<sup>え</sup>たおんだべど思<sup>も</sup>て、

「与蔵、与蔵、ひるまだはあ」

て叫<sup>さか</sup>だど。んでも出<sup>で</sup>はて来ねあおんだはげあえ、昼<sup>え</sup>まだでばどさ行<sup>え</sup>たおんだべど思<sup>も</sup>て、沼のそばまで行<sup>え</sup>て、

「与蔵、与蔵」

て、なんども叫<sup>さか</sup>だど。ほんでも出<sup>で</sup>はて来ねけど。作治あ、与蔵あどさ行<sup>え</sup>たおんだべ、おがしごどもあるおんだと思<sup>も</sup>て、まだ、「与蔵、与蔵」て叫<sup>さか</sup>だば、沼の水あ、ざざあつとなて、蛇<sup>へび</sup>んであえ出<sup>で</sup>はてきたけど。作治あどして逃<sup>ね</sup>げんべどおもたども、腰あ抜けでは、動<sup>えご</sup>げねぐなてしまたけどは。

ほうしたば、ほの蛇<sup>へび</sup>んであえ、

「作治、作治。おれだ、与蔵だ。おれあ沢の岩魚あふて食たば、のどあかわえでのどあかわえで、沼の水、息つがず、すこであえま飲だば、こげあえんてしまたなよは、まずまず困またごどあ出来でしまたは。こげた蛇んであえの姿んてしまたはげあえは、とても家さ帰あえらんねぐなてしまたは。おめあえどさも、こんな姿見へであえぐねあえあだども、かがやわらす達さ、おれあこげあたかつこんなたはげあえ、家さ戻らんねぐなてしまたて言てもらうべと思て出はてきたあだ。おれあ、こげあたごどんなたはげあえは、あどあ誰あどさも会わんねはげあえ、ゆつくん言てころは」

ていうど、まだ、ざざあど、沼さくくへ行てしまたけどは。

作治あどでしてどでして、わらわらど村さ逃げて行たど。ほうして与蔵あ家のかがどさ教へだど。ほうして、あどあ誰あどさもあわんねていうけて聞がへだど。ほうしたば、与蔵あ家のかがどでしてしまて、

「なえだて、おれあ家のつあつあ、蛇んであえなたて、まずまず、なえていうごどだべ。困またちや困またちや、おらどごおえで沼さへてしまたなて、ないてい

うごつたべ。おらなんずんしたらえべ」

て泣<sup>ね</sup>っただけどは。ほうして、

「なんだかつこなたてえ、おれあ家の<sup>え</sup>つあつあだおん。一生の別れだおん。行てあてこねんね、わらす達どさも、会わへねんね」

ていうど、泣ぎながら、わらす達どご連<sup>つ</sup>で、ほの沼さ行たど。ほうして、沼のそばで、

「つあつあ、一生の別れだおん、なんだ姿だてえはげあえ、もう一度姿見<sup>いちど</sup>へでころ、わらす達どさも会<sup>あ</sup>てころ、つあつあ」

て、大つき声で叫<sup>さか</sup>だど。ほんでも、ながなが出はて来ねけど。ほんで、かがあ、まだ、

「つあつあ、つあつあや。もう一度姿めへでころ。一生の別れだおん、あわねば諦<sup>あきら</sup>めらんね」

て叫だど。ほうしたば、沼の水あ、ざわざわど鳴て来て、ざざつていうど一丈もあるよだ大つき蛇んであえ、姿あらわしたけど。ほうして、

「えぐ来てくつだ。おれあ、こげあえた姿んなてしまて、さだげねはげあえ、出  
はらね勘定かんじよであえったども、一生の別れたて言われつど、おれだてお前めどごやわ  
らす達どご、もう一度見であえはげあえ出はてきた。まずまず、おらは、ないの  
因果だおんだんだが、沢の岩魚五、六匹食たば、のどあかわえで、のどあかわえ  
で、沼の水、がぶがぶど飲だば、こげあえた蛇んであえんなてしまたなだは。こ  
げあえんなてしまてがらだば、なんずもさんねはげは。おれあ死だと思て、あぎ  
らめでころは。お前めどさばり、これがら難儀さへんども、わらす達も、もう少すこす  
で大つきぐなんなだはげあえ、体ばりであえずんして（大事にして）、達者でくら  
してころ。わらす達どご頼むぞ。ほうして、おれあおめだどご、陰ながら守てつ  
さげあえな。んであ、これつきりだぞ」

ていうど、まだ、水ざぎつて言わへで、沼んながさ入て、見ねぐなてしまたけ  
どは。

かがやわらす達あ、なんぼ「つあつあ、つあつあ」て、泣ぎながら叫だて、ほ  
れきり出はてこねけどは。んだおんだはげあえ、かがやわらす達も、諦めて、家

さ帰<sup>け</sup>あえたけどは。

ほれがら、ほの沼、与蔵<sup>へ</sup>あ入た沼だはげあえ、ていうなで、（与蔵沼）どつけたあ  
だど。

とんぴん からんこあ ねつけどは。

## 10 鳥こむがし

むがしあつたけど。

むがしな、ここだば、塩根<sup>しよね</sup>川<sup>が</sup>のおぐみであえんた山のながさ、兄弟<sup>きょうで</sup>二人い  
であえつたど。ほうして、二人<sup>したり</sup>あ山仕事したり、畑仕事したりしていであえつた  
ど。

六月の朔日<sup>えも</sup>あ、芋むぎの朔日<sup>えも</sup>ていうべ。んだはげあえ、兄あ、弟どさ、  
「おず、今日あ、芋むぎの朔日<sup>えも</sup>だはげあえ、芋掘<sup>ほ</sup>てきて煮でおげ」

ていうけど。ほんで弟あ、

「んであ、兄んつあ山がら来るまで、煮でおぐはげあえな」

ていうけど。ほうして、兄あ山仕事さ行ぐど、弟あ芋掘り行たど。

弟あ芋掘てみだら、今年あ育ぢあえぐねくて、太つて芋な的一本もねなだけど。

んだて仕方ね。ほの芋洗らて、すっかりひげ根もむすて、はやして煮だど。ほうして、そんまあんつあ、昼上がりして来んべど思て、待じつだど。

んでも、兄んつあながなが来ねけど。芋もちようどええあんべん煮だし、昼まんなたはげあえ、こんだ兄んつあ来んべて待じつだども、来ねけど。ほうして、昼すぎんなたども兄んつあ来ねし、弟あ腹もへてきたおんださげあえ、んでああんまり来ね、食てまじでつがは、ていうなで、

「兄んつあ難儀して腹もへてくんなだはげあえ、ええどご残しておぐべ」

て、おわしりの方の細こえどごばり食て、腹くつつぐなたんだし、はどめあえんどさ、ごろつと寝つだどは。

ほうしているうづん、兄あ、

「ああ、腹へった」て来たど。ほして、家<sup>え</sup>さ入<sup>へ</sup>て行<sup>え</sup>てみだば、弟あはどめあえんどさ寝<sup>ね</sup>で、ゆるりさ鍋あ掛<sup>か</sup>がつたべ。んだはげあえ、腹へたんだし、鍋<sup>なべ</sup>のふたとて見だど。ほしたば、ええ匂<sup>にお</sup>えして、芋あえあんべあえ煮<sup>ね</sup>つたよだはげあえ、一つ取<sup>と</sup>つて食<sup>く</sup>つてみだば、とでもんめあえけど。ほうして、もと食<sup>く</sup>うべどもて、鍋<sup>なべ</sup>ん中<sup>ちゆう</sup>ええぐ見<sup>み</sup>だば、太<sup>ふ</sup>つとえ芋<sup>いも</sup>なのさっぱりねくて、みな細<sup>こ</sup>えなばりだずおん。兄<sup>あに</sup>あ、今年<sup>ことし</sup>あ芋<sup>いも</sup>の出来<sup>でき</sup>あえぐなくて、どれ掘<sup>ほ</sup>ても細<sup>こ</sup>えなばりだて知らねべ。んだおんださげあえ、ええどご、おずばり食<sup>く</sup>て、おれあ難<sup>がた</sup>儀<sup>ぎ</sup>して、おそぐなて、腹へて来<sup>き</sup>んな分<sup>ぶん</sup>がてで、おれあどさ、こんた細<sup>こ</sup>えどごの、んまぐねどご残<sup>のこ</sup>したたおんだ。おわ（自分<sup>じぶん</sup>）ばりなんぼがんめどご食<sup>く</sup>たべて、ごしえでしまたけどは。ほうしてこんだ、「あんまり面白<sup>おもしろ</sup>ぐね、おずあ腹<sup>はら</sup>さえでみねんね」というど、みじや（水屋<sup>みづや</sup>）がら包<sup>ほう</sup>丁<sup>てい</sup>もてきて、はどめあえさ寝<sup>ね</sup>つた弟<sup>てい</sup>の腹<sup>はら</sup>さえで見<sup>み</sup>だあだど。ほしたば弟<sup>てい</sup>の腹<sup>はら</sup>さ入<sup>い</sup>った芋<sup>いも</sup>じよおのお、しりの方<sup>かた</sup>のえぐえぐ細<sup>こ</sup>えどごばんで、ええどごなのさっぱり入<sup>い</sup>てねけど。ほして、入<sup>い</sup>ったなじゅあ、えぐえぐんめあえぐねどごばんだけどや。

兄あ、ほれ見でびつくりしてしまて、えぐねあごどしたは、えぐねあごどしたはて、泣<sup>ね</sup>っただけどは。んだべちややな、腹さえで殺してしまてがらだば、ただ泣ぐより他ねんだおん。ほんで兄あ泣で泣で、しめあえにあ鳥こんなてしまたけどは。ほして、

ほとととと　ほとさげだ

ほとととと　ほとさげだ

て、一日ん、八千八声鳴ぐなだけど。朝から晩まで、ほれこそ、暗<sup>くれ</sup>あうつから、暗ぐなても

ほとととと　ほとさげだ

ほとととと　ほとさげだ

て鳴ぐけど。あんまり鳴ぐおんだはげあえ、口のわぎから血流してつけどや。とんぴん　からんこあ　ねつけどは。

（集成四六「時鳥と兄弟」）

## 付 記

高橋良雄さんから、昔話の原稿が送られてきた。美しい字で埋まったすばらしい原稿に十話の昔話が、語り口調そのままに書かれてあり、「山形の民話」への寄稿である。しかし小冊子のことで、全部のせるのに一年以上かかることを考えて、一冊にまとめたものである。次々にお送り下さるとのこと、第一集とした。

(文責 武田 正)

及位の昔話（一）

話著者 高橋 良雄

編 武田 正・山形民話の会

山形県南陽市赤湯

三二八〇の四

昭和五十五年八月二十五日 発行

\*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四